

全 県

◎事業名

海藻を活用した商品の首都圏販路開拓と「藻活」全国PR・啓蒙活動実施事業



〔事業主体名〕
あおり海藻コンシェルジュ協会
〔事業年度〕
平成30・令和元年度
〔助成金使用項目〕
○商品開発
○販路開拓・ニーズ調査
○展示会販促物、テーマソングの製作 他
〔連絡先〕
株式会社 海藻開発コンプリオ
菊地 幾代
〒030-0851 青森市旭町1-2-36
TEL.017-752-8755

プロジェクトの経緯

平成30年度～平成29年度、同業2社と「あおり海藻コンシェルジュ協会」を設立。平成30年度から設立イベントを皮切りに、海藻の健康機能の啓蒙と加工品開発に取り組み

未利用海藻の栄養価と機能性に注目

三方を海に囲まれた青森県は、実に数百種類もの海藻が繁殖する海藻王国です。しかし、他県では食利用されているも青森県では食文化として定着しておらず、その調理法が知られていない海藻も数多くあります。これらの中には、近年、その栄養価や機能性が目立され、健康食品として新たな地域資源となる可能性を秘めたものもあるといえます。

「大間のマロやウニアワビがおいしいのは、栄養豊富な海藻を食べているから。ツルアラメもそのひとつ。青森では、コンブの漁場を売らず厄介者と捨てられていましたが、食物繊維やポリフェノールを含む優れた食材で、他県では食利用されている例が多くあります。未利用の海藻のおいしさや機能性への理解が広がり、消費が拡大すれば、漁師さんたちの所得の向上にもつながります。」

こうした観点から、自ら株式会社海藻開発「コンプリオ」を立ち上げ、大産産ツルアラ

3社それぞれが得意の海藻で新商品を開発

平成30年度、協会の活動の浸透に向け、ロゴマークを制定。新商品の開発と産業化の参考とするため、函館市のコンブの作業所・干場などを視察。「函館がこめ昆布のスーパーブランド化をめざす」函館がこめ連合会」と交流も深めました。「函館は、海藻利用に関す



あおり海藻コンシェルジュ協会 会長 菊地 幾代さん

青森は海藻パラダイス
おいしくて体にいい海藻が
まだまだあります

る産学官共同研究の先進地。ダルスという海藻の商品化への取り組み、資源量、採取時期などについて情報交換するなど、商品開発や販促の面では学ぶところが多くありました。」

10月には青森市で設立記念イベントを開催。「弘前大学農学生命科学部の前多隼人准教授が、海藻の健康機能について講演し、「少量でも毎日摂取して」と呼びかけてくださいました。また、調理例として、とろろ昆布とクリームチーズのデップ、ワカメのタルタルソース、アカモクのドレッシングのサラダなどを試食していたが、海藻の多彩な食べ方を紹介しました。

このほか、県内で食育イベントを開催するなど、海藻の健康機能の啓蒙に取り組みながら、各社は新商品の試作を進めてきました。「月に一度、県のA B C（あおり食品ビジネスチャレンジ）相談会の場で3社が集まり、

お互いの試作品について意見を交換しました。県産業技術センターの協力を得て、同年度中に、「あおり新商品お披露目会や『藻の正直』商談会に試作品を出展することまでこぎつきました。」

新商品もデビューし「藻活」のプロモーションが本格化

令和元年度、9月の北陸地方の視察を経て、翌年2月によいよ各社の新商品が完成すると、首都圏の展示会での販路開拓や市場調査も始まりました。「実際に売れる商品ができたので、プロモーションもやりやすくなりました。首都圏の消費者は、健康についての意識も高いので、認知さえしてもらえれば販売は伸びていくのではないかと期待しています。」

展示会に合わせて、協会では、ユニフォームやリーフレットなどの販促ツールも製作し

ました。「海藻より親しんでもらう活動を「藻活」と名付け、藻活の浸透に向けて、売り場で流してもらおうテーマソングや、ジングルも製作しました。これは、東京のプロのミュージシャンと相談しながら、歌詞については私もアイデアを出して作ったものです。春の海藻の時期には、ショッピングセンターでテーマソングを流して、多くの人に、「ねばねば、つるつる」の健康食品のイメージを刷り込みたいですね。」



(左上) 食育イベント「親子で海藻御膳作り」で海藻の魅力を啓蒙
(左下) 函館視察で、函館がこめ連合会会長と協会メンバー
(右下) 協会の活動の浸透に向け制作したロゴ入り販促ツール

03

〔全県〕海藻を活用した商品の首都圏販路開拓と「藻活」全国PR・啓蒙活動実施事業